

〔「中国青花と染付磁器—京都の鹿背山焼—」展によせて〕

明～清時代の青花と鹿背山焼

17世紀の初め、現在の佐賀県有田町で磁器が焼造され始めてより、中国明時代末から清時代の磁器は日本の磁器の手本とされ、文様や器形が写されました。京都では江戸時代中期に入り、奥田頴川が磁器の焼造に成功します。その後、青木木米や永楽保全らが真に迫った中国陶磁写しを行っており、明時代末の古染付や祥瑞を写しています。

酸化コバルトを主成分とした顔料で白地に青い文様が描かれた磁器は、中国では「青花」、日本では「染付」と呼ばれ、現在までも広く親しまれています。日本の陶磁史は中国の陶磁器と切り離しては考えられませんが、日本の染付は、磁器の焼造技術が広まり、京都を中心として活躍した陶工が各地に赴いて技術を広めたことにより、発展していったという一面を持っています。そのような状況の中で、中国陶磁への憧れと需要は高く、精巧な写しが作られました。

今回の展覧会では、現在の京都府木津川市鹿背山で江戸時代中期から明治時代にかけて質の高い磁器の焼造が行われた鹿背山焼を取り上げ、日本における磁器の発展と需要の姿を見ていきます。

鹿背山には奈良時代に瓦窯が築かれています。江戸時代、公卿の一条家の知行地であった鹿背山には一条忠良(1774-1837)による殖産興業のもとで、文政十年(1827)に鹿背山焼の窯が森本助左衛門によって開かれたとされます。その後、一條

忠香(1812-63)の時に、京都の吉田茂左衛門から鹿背山での築窯願いが出されて許可が下り、磁器の焼造が行われ、京都の蒔絵師で、五条坂で窯業に関わっていた中川利三郎が窯元を引き継ぎます。

「染付花鳥文水指」(図1、鹿背山焼、大和文華館蔵)は中川利三郎(1823-1912年、号雲洞)が製作したことが、底裏に記された染付銘「於城南鹿背山雲洞製」(図2)からわかる作品です。滑らかな白い磁胎に、濃紺色の鮮やかな絵付けが映えています。筒形の器形は、二箇所に節が設けられ、底部に近い裾がやや広がっていることから、竹の根元に近い部分を象っていることがわかります。文様は胴部上段に松・桃・竹・梅などの果樹と鳥を組み合わせた花鳥図を横位に廻らせ、節を境界として、下部には山水景の中に馬に乗って橋を渡る人物や舟に乗る人々の姿が見られる山水人物図があらわされています。また、口縁のすぐ下部に波涛文を、下端に円文が並べられます。波涛文の中には花文や宝文が描き込まれ、円文には「福」「寿」の文字が交互に記されており、中国・明時代末に景德鎮民窯で焼造され、日本に輸出された祥瑞を手本としていることが見て取れます。描線はややブレたようにわずかに滲んでいます。樹木の葉や水流を示す波の描写など、細部まで丁寧に描かれています。

このように、鹿背山焼は祥瑞の特

徴である幾何学文や円文を多用した文様と構成を取り入れ、祥瑞写しや祥瑞風の磁器を盛んに焼造しています。

日本に伝わる祥瑞にあらわされた文様とはほぼ同じ図様も鹿背山焼に見いだすことができます。図3は「染付山水丸文鉢」(鹿背山焼、江戸時代、京都国立博物館蔵、特別出陳作品)の見込みに描かれた文様で、図4は「砂金袋水指」(祥瑞、中国・明時代末、藤田美術館蔵)の蓋裏に、濃紺色の鮮やかな絵付けが映えています。筒形の器形は、二箇所に節が設けられ、底部に近い裾がやや広がっていることから、竹の根元に近い部分を象っていることがわかります。文様は胴部上段に松・桃・竹・梅などの果樹と鳥を組み合わせた花鳥図を横位に廻らせ、節を境界として、下部には山水景の中に馬に乗って橋を渡る人物や舟に乗る人々の姿が見られる山水人物図があらわされています。また、口縁のすぐ下部に波涛文を、下端に円文が並べられます。波涛文の中には花文や宝文が描き込まれ、円文には「福」「寿」の文字が交互に記されており、中国・明時代末に景德鎮民窯で焼造され、日本に輸出された祥瑞を手本としていることが見て取れます。描線はややブレたようにわずかに滲んでいます。樹木の葉や水流を示す波の描写など、細部まで丁寧に描かれています。

また、図3の「染付山水丸文鉢」は、底裏に「大明成化年製」と染付で記されます。中国陶磁では、しばしば製作年よりも前の元号が書き込まれて仮託されます。「大明成化年製」は成化(1465-1487)年間の製造となり、明時代末の天啓年間(1621-27)から崇禎年間(1628-1644)にかけて作られた古染付や祥瑞にも記され

ているものがありますが、鹿背山焼では仮託したというよりも、仮託銘も文様と同様に中国陶磁の要素として写したと考えられます。

さらに、清時代の磁器にも一見そのものと見られる精巧な写しを作っています。「赤壁賦刻字鉢」(図5、木津市教育委員会蔵、特別出陳作品)は、清時代の磁器を高台の形状まで丁寧に写しています。鉢の口縁内部と見込みに青花で蔓唐草状の渦巻文が密にあらわされ、見込み中央に「永楽年製」の文字が青花で記されています。側面には北宋時代の蘇軾による「赤壁賦」の文字が細い線で刻まれています。本家との違いは、染付がややくすんだ暗い色合いに発色して、口縁内部ではやや滲み、高台裏面に掛けられた透明釉を拭き取っていることなどが挙げられますが、白い磁胎に艶やかな透明釉が掛けられた美しい姿を作り上げています。鹿背山焼が写しの対象として幅広い中国陶磁を対象とした様相がうかがえます。

まとまって見られる機会の少ない鹿背山焼ですが、本展覧会では中国の青花および日本の染付の関係の中で鹿背山焼が目指したものを考えたいと思います。(瀧朝子)

※図4は「陶磁大系 第四四巻 古染付 祥瑞」(平凡社、1972年)より複写させていただきました。



図1 染付花鳥文水指
大和文華館



図2 染付花鳥文水指(底裏銘)



図3 染付山水丸文鉢(見込み)
京都国立博物館



図4 砂金袋水指(蓋裏)
藤田美術館



図5 赤壁賦刻字鉢
木津市教育委員会